

プラパゴン⑦

(1) 魔王プラパゴンとその母親は、肉を焼いて食事をしておりました。「おふくろ、この飲み物はなかなかうまいぞ」「では私も、イキギモを食べることにしようかね」

(2) そのにおいが、穴ぐらの奥にとらわれているボーソンのところまで流れできました。「あらいやだ、人間の肉のこげるにおいだわ。今に私も、ああなつてしまふのかしら」

(3) その頃であります。妹のボーソンを助けて砂漠の魔王プラパゴンを退治しようと、アリーはデブのドリゴを連れて、山の方へ向かつて歩いていました。焼け付くような日の光。どこまでも行つても続いている砂漠であります。二人がやつてくると、

(4) 「おや、これはなんでしょう。なにか骨のようですね」「この骨、動いているぞ」一人は驚いていましたが、その時であります。

(5) 砂が空中高く舞い上がり、手だけ出していた怪物が突然に、アリーとドリゴの前にその姿を現したのであります。

(6) 「ラオー。お前らふたり、とつて食うぞ」アリーは剣を抜いて立ちふさがりました。そして

(7) 「エーイ」と横なぎにひと振り振れば、何者も切り倒す事のできる名剣であります。続いてもうひと太刀。

(8) 「ヤーッ」骨の怪物は、まつ二つに切り裂かれました。するとどこからか「ハラショ一、ハラショ一、テンホウ、テンホウ」という声が。

(9) よくよく見ると骨の怪物から出てきたのは、中国の小人のおじいさんでした。「ハラショ一、あなた、なかなか勇気があるね。私、気に入りました。いいもの、あげましょう」さて、中国の小人のおじいさんがくれたのは、一体なんだつたのでありますか。